

W
OMEN'S



NEWS

2012 MAR.

VOL.50

S
PORTS

F
OUNDATION



東日本大震災への世界からの温かい支援に「なでしこジャパン」の選手たちはワールドカップ優勝後に感謝の気持ちを示した（フォート・キシモト）

J
APAN

Message 社会ぐるみで女性参画の拡大を！	三ッ谷洋子	2
インタビュー 「女性とスポーツについて四半世紀前から研究してきました」	女性スポーツ医学研究会理事 落合和彦さん	3
Women's Sports 不滅のランナー「人見絹枝」を求めて(上)	田中良子	6
Column アメリカの風「女性スポーツ便り」最終回	羽石架苗	7
Member's Room 東日本大震災 被災地支援特集		8
事務局便り		9

社会ぐるみで女性参画の拡大を！

昨年 11 月、私の会社が会員になっている社団法人スポーツ健康産業団体連合会から、1 通のメールが届きました。経済産業省からの女性活用に関する通達です。

「第三次男女共同参画基本計画及び政策・方針決定過程への女性参画の拡大について」というタイトルで、6 枚つづりの文書が添付されていました。

かつてもはやされた「男女共同参画」という言葉ですが、最近ほとんど聞きません。「今ごろ何なのか」と目を通してみると、女性スポーツの推進にもかかわる内容であることが分かりました。1 年前に策定されたのですが、「積極的に取り組んでいただくようお願い申し上げます」とありました。

策定時はマスコミがほとんど取り上げなかったせいか、ほとんど私の記憶にはありません。民間での取り組みも遅々として進まないで、関連団体を通して発破をかけようという意図のようです。

異常に低い日本の女性活用度

2009 年 9 月、国連の女性差別撤廃委員会は、女性差別撤廃に関する日本政府の取り組みが「不十分」との勧告を出しました。この年、民主党は衆議院議員選挙に圧勝し、女性議員 40 人が当選しました。その結果、過去最多となる 54 人の女性議員が誕生し、全議席の 11.3% を占めることとなりました。

しかし、「列国議会同盟」(IPU) のランキングでは、187 カ国中 120 位という不名誉な順位。スウェーデン (45%)、ノルウェー (39.6%)、ドイツ (32.8%) などのヨーロッパ諸国や、アジア勢の中国 (21.3%) や韓国 (13.7%) にも追いついていません。

政治の世界だけでなく、他の分野においても、日本は女性の活用度が異常に低く、例えば女性取締役は 1.4% で 35 カ国中、5 番目 (CWDI) という情けないレベルです。

2020 年には女性を 30% に

こんな状況が続いていることから、先の通達が出されたと考えられます。送られてきた文書は要点を抜粋したもので、具体的な内容が示されていました。「社会のあらゆる分野において、2020 年までに、指導的地位に女性が占める割合が、少なくとも 30% になるよう期待する」とあり、『2020 年 30%』と呼ぶ目標が設定されています。

行政分野、雇用分野、その他の分野に分けて、女性の参画を促しています。「独立行政法人、特殊法人及び認可法人」では、役員に女性を積極的に登用し、女性の参画拡大のための計画策定など積極的な取組促進を「強く要請する」と、強調する表現を使っています。

「スポーツ団体」は「その他の分野」として挙げられていました。前提として「女性の能力発揮がそれぞれの団体・組織・業界や地域の活性化に不可欠という認識の醸成を図る」としています。組織の人事をつかさどる男性たちが、最初から女性の存在を意識していない現状への指摘と読むことができます。

具体的には「2020 年 30%」の目標達成に向けて、「2015 年までの目標や、現在、女性がゼロの場合には「最低 1 名・女性一割運動」などの目標を設定するよう、要請しています。

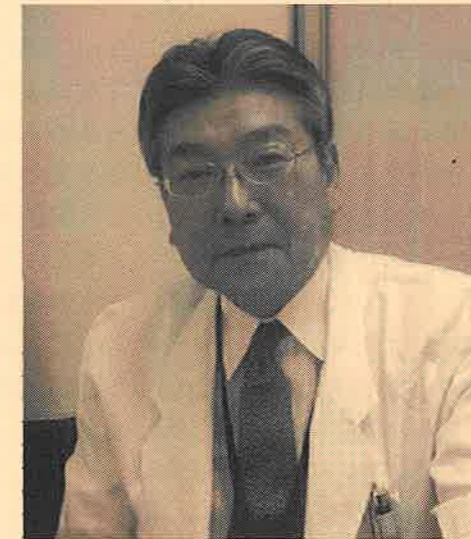
なでしこジャパンの活躍で、女性スポーツに追い風が吹いている今、皆さんもそれぞれの分野で「2020 年 30%」実現のために、もう少し頑張ってみませんか。

「女性とスポーツについて 四半世紀前から研究してきました」

女性スポーツ医学研究会理事 落合和彦さん

サッカー、柔道、レスリング、マラソン、そしてラグビー、ボクシングと男性スポーツと思われていた競技が、女性のオリンピック競技として正式に認められるようになり、男性以上の活躍を見せています。その一方で、女性スポーツとしての歴史が浅く、未だ女性選手のための安全な指導法が確立されていないという面も、しばしば見受けられます。

そこで、今回は東京産婦人科医会会長で、女性スポーツ医学研究会の理事でもある落合和彦ドクターに、現在の女性選手が抱える身体的な問題点について、医学の側面からお話をうかがいました。(聞き手：永田千恵)



女性スポーツの医学的な問題を指摘する落合和彦ドクター(撮影：永田千恵)

●問題視されなかった女性選手特有の病気

——最初に、先生が理事をされている女性スポーツ医学研究会について、お話しいただけますか？

落合 私どもの先輩で、当時、教授だった寺島芳輝先生が、スポーツ医学と産婦人科を結びつけた女性のトータルヘルスケアという考え方を持っていたらっしゃる方でした。

その寺島先生が、我々に提案されたことをきっかけに、1987 年にこの研究会が発足しました。当初はどちらかというと妊婦スポーツを含めた健康スポーツと競技スポーツの両面から、医学的なサポートをとということでやってきました。会員も最初は産婦人科の医者だけだったんですが、それだけではどうしても医学的な側面ばかりになって

しまいます。そこで、周辺領域の栄養、スポーツトレーニングなども交えて、広くみていこうということになりました。

現在、メンバーにはドクターだけではなく、体育大学や筑波大学の体育関連学部の研究者や学生、スポーツトレーナー、保健師などといった方々もいます。

——1980 年代後半という、男性中心のスポーツだったマラソンや柔道がオリンピックで正式な女子競技となって、女性スポーツに脚光が当たるようになってきた時期ですね。

落合 そうですね。ただ、当時はスポーツと女性の体の関係について、あまり注目されていませんでした。スポーツ選手と月経の問題など、医学と

しても十分に知られていなかった時代です。

特に、過度の運動によって発生した運動性無月経について、医療の面で実際にどのように介入していけばいいのか、分かりませんでした。かなり若い子でも、この状態が起きることはずっと以前から分かっていたのですが、スポーツ選手だったら当然、起こり得るということで、あまり病気として語られていなかった。

女性を指導する立場の方たちが、あまり気にしていないという面がありましたね。

——さほど問題視されていなかったんですね。しかも、生理については男性の指導者には特に相談しにくいところですよ。

落合 選手同士でも、なかなか話しにくかったということもあるようですね。

——運動性無月経ということでは、私も以前、柔道の選手から、減量の影響で月経が止まってしまったということを知ったことがあります。

落合 柔道などウエイトコントロールが必要となる競技では、その問題とパフォーマンスの関係はなかなか難しいものがあります。

陸上の長距離の選手もそうです。やはりある程度、体重を絞ったほうが記録が伸びやすいけれど、その一方で、それが体に“悪さ”をする。体脂肪の減少と女性の身体はかなりはっきり結びついてきますから。こうした女性とスポーツに関する研究活動を 20 数年のなかでやってきて、少しずつ浸透してきているかなとは思っています。

しかしながら、クローズドの会では発信力が弱いので、私たちの会の役員が参画している日本臨床スポーツ医学会という大きな組織の産婦人科部会をお借りして、発信しているのが現状です。

●3つの医学的な問題に国の理解を

——現在、女性の現役選手が抱えている問題を、先生はどのように考えていらっしゃいますか？

落合 女性スポーツを取り巻く大きな問題は、3つ挙げられます。無月経の問題。精神疾患、つまり精神的な問題。それから骨粗鬆症です。

例えば、柔道やレスリングなどウエイトコントロールが激しいと、神経性食思不振症になることがあります。体重のことが常に頭から離れなくな

ってしまい、これによって食べても吐くという習慣ができ、食べ物に対する嫌悪感というものが出てきてしまう。この裏返しで、過食症になってしまう人もいます。どちらも一種の精神失調ですね。そのようなメンタルな部分での問題点があります。

また、無月経の問題ですが、期間が長くなると疲労骨折を起こしやすいなど、他のファクターがいろいろと出てくることが考えられます。月経が止まっている期間が長ければ、その間に骨からカルシウムが脱出してしまう…。要するに、おばあさんの骨と一緒にっちゃうんですよ。

マラソン選手など、引退する頃には骨がボロボロになってしまったという報告もあります。もちろん、そこまでいってしまっても、競技を辞めればだんだんは良くなるかもしれません。でも、それだけ骨量が落ちてしまうと、その人が本当におばあさん、つまり高齢になったとき、もっと辛い状態になってしまうかも知れません。

こうした問題は競技ごとに異なるので、一概にはいえません。その競技特有の体型といったものがありますからね。水泳しかり、ウエイトコントロールが必要となる柔道しかり。その競技ごとにかかえる問題はあって、そういう選手たちに応じた医学的なサポート、介入が必要になるかと思えますね。

——個別に見ていく必要があるんですね。

落合 昨今、女子サッカーのなでしこが注目を集めています。女性スポーツは男性に比べてテーマになりにくいといえますか、ニュースになりにくい。まあ、これは一つにはマスコミの問題があるのだと思いますが、もっといろんな角度から女性スポーツを取り上げて、我々が意見をいえる場ができればいいなと思います。

——確かに、女性スポーツは強くなると取り上げられることはありますが、体の問題は置き去りです。もしかしたら、ナイーブな問題なので、取り上げにくいということがあるのかもしれない。

落合 そうなんですね。もっとそのあたりを国にも理解してもらい、積極的に関わってもらえるようになるといいのですが。

——とはいえ、女子選手の引退年齢も伸び、ママさん選手も増えてきました。そこには医療のサポ

トが大きく関係していますよね。

落合 確かに。でも、もう一方でちょっと注意しておかなければいけないのは、引退年齢が伸びていると同時に、競技の開始年齢が下がっているということ。20～30年前とは違うわけです。

かつては女性の無月経や妊娠などについて、競技を辞めれば問題はないだろうと考えられていました。しかし、最近の競技の開始年齢、あるいはトレーニングの強度などは、昔とは比べ物にならないものがあります。その点から、現在の選手が10年、20年経ったときにどうなっているのかというところは、やっぱり注目していかなければいけない。

我々の立場からすれば、第二次成長というのも大事に迎えながらやっていただければいいなど。しかしながら、ちょうどスポーツ選手としていろいろな技術を覚えなければいけない年齢と、女性の体が大きく変化する時期というのが、かなり重なるんですよ。

——中学生くらいですね？

落合 そうです。確かにスキル、能力の獲得に関しては、この時期がもっとも適しているんです。ですから、指導する立場の方々には、ぜひとも女性の体に関する知識を持ち、十分に注意しながら指導をしていただけるといいのですが、そこがまた難しい。

というのも、トップアスリートをめざす人たちは学校体育と離れてしまう人が多いから。そこら辺が、私どもとしてもなかなか悩ましいところですね。

●トップ選手へのサポートと一般への啓発

——JISS（国立スポーツ科学センター）にも、女性に特化した医療サポートはないと、聞いています。

落合 我々の会長の目崎登先生がどこまでかかわっていらっしゃるかわかりませんが、おそらく中心的にはやっておられないと思います。

我々、産婦人科の医者にも、もっともっと女性とスポーツの問題をきちんと理解してくださる方を増やしていくことが大切です。以前より増えて

はきましたが、やはりまだまだでしょう。

——ということは、スポーツが女性に及ぼす影響についての解明は、まだまだ時間がかかることになりそうですね。

落合 まだまだこれからですね。25年経ってもこんなもんですから（苦笑）。

100年の歴史のなかで女性のスポーツは進展してきた。それと同じくらい解明には時間がかかるでしょう。

——そのなかで、これからどのようなことをやっていきたいと考えていらっしゃいますか？

落合 一つはトップアスリートに対する専門的なメディカルサポート。主体となるのは内科ないし整形外科の先生でいいと思いますが、私たち産婦人科のドクターが相談に乗る形をつくること。

もう一つは、いわゆる一般の方々に対するの活動です。若い女性の場合、月経とどのようにつきあっていかなど、そういった教育的な啓発活動も必要でしょうし、どれくらいの運動量に効果が期待できるかといった部分の知識を広めていくことですね。

——最後に、WSF ジャパンについて、期待されることなどありましたら、お聞かせください。

落合 長く頑張っていらっしゃるなと思っています。それだけ、皆さんはいろいろなフィールドを見ていらっしゃるの、例えば『〇〇に対して、医学的にはどう考えますか』などといったように、我々に課題を投げかけてくれれば、それに対して専門的なスタッフを集めて、1年かけて研究しましょうというご提案もできますね。

それをやるには予算も必要で、なかなかできにくい環境があるのかも知れませんが。

それから、いろいろタイアップしながら情報を発信していくということも一つの方法かもしれませんね。

——それはいいご提案ですね。本日はお忙しいなか、ありがとうございます。

<落合和彦さん> 東京慈恵会医科大学葛飾医療センター産婦人科教授。東京産婦人科医会会長。女性スポーツ医学研究会理事。1951年生まれ。WSF ジャパン会員。

Women's Sports

不滅のランナー「人見絹枝」を追い求めて (上)

田中 良子

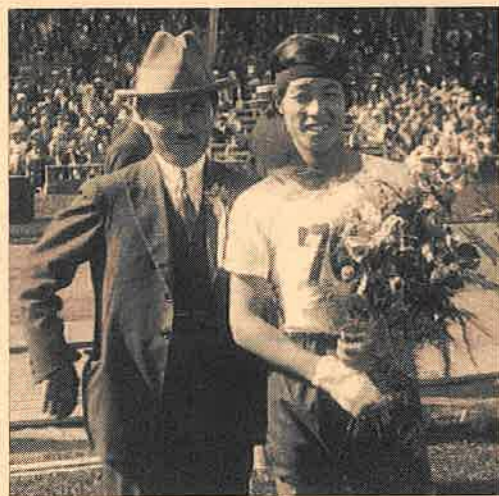
「人見絹枝」という陸上競技選手の名前をご存知でしょうか？

1928年のアムステルダム・オリンピックで800mに出場、死闘を演じ2位になりアジアの日本女子選手の代表としての面目を施して帰国したという話が、多くの方の記憶にとどめられているのではないかと思います。

生誕から約100年になろうとしている「人見絹枝」を今さらとお思いの方がいらしたとしたら、一寸待って下さい。時代は1925～1930年代ですが、世界記録をつくり優秀な選手ということにとどまらず、女子陸上競技の発展に対する考え方や女性としての生活の仕方、スポーツとは何か、女性の生き方とはどのようなことかなど、現代においても考えるヒントが光を放っているのです。

「職業婦人」として示した女性の生き方

彼女は、1926年ごろから1930年までのわずか5年の間に、日本記録はもとより100m、200m、走幅跳、三段跳など7種目に世界記録をつくりました。記録をみても今日まで、残念ながら人見以外で日本女子の世界記録樹立の声は聞かれています。



優勝を喜ぶ人見絹枝(右)と、マネジャーとして支えた黒田乙吉(イエーテボリスports博物館所蔵)

1926年スウェーデンのイエーテボリ市で開催された第2回国際女子競技会にただ一人で参加し、個人総合優勝を果たしました(写真)。世界的に一躍有名選手となったのです。時代は丁度、封建的家父長制にあった女性達に「職業婦人」の風が吹き、自立を目指す生き方が生まれてきた大正デモクラシーの時代です。人見は、二階堂体操塾で体育の理論や実践を学んだ後、大阪毎日新聞社の新聞記者になります。「職業婦人」の先端に行く仕事であるために、物事の観察や洞察力など持ち前の頭のよさも手伝って身につけて仕事をやりこなしていきます。

1926年から1930年の5年間に3回海外に遠征していますが、その間の彼女の人間として大きな飛躍が見られます。日本という国を意識し、陸上競技を通して女性の陸上競技の発展を考え、さらには女性の将来の健康であるべき姿を心にえがいているのです。

海外で取材した家庭婦人や勤め帰りの女性がグラウンドに来て気軽に陸上競技の練習する姿を心に焼き付けて、少しでも日本女性が健康のために運動に親しめるようにと「10分間体操」を考えたり、『最新女子陸上競技法』などの指導書を出版したりしています。

彼女の描いていた女性の姿は、今でも新鮮な課題として遺されているのです。私自身、陸上競技に携わってきたものとして彼女が考えていた課題を明らかにして、現代の女子陸上競技の発展を考えていくと共に女性の生き方を改めて考えたいと思っています。現在、人見絹枝の生き方をその時代背景の中で、どのような影響をうけたのかなどをも調べているところです。(つづく)

【たなか・よしこ】 国際陸上競技連盟(IAAF)女子委員会委員、元日本陸上競技連盟女子委員会委員、WSF ジャパン会員。

Column

アメリカの風「女性スポーツ便り」最終回

遅咲きでもいい、夢をかなえたい

羽石 架苗

「日本人初、米国の大学レベルでサッカーの監督に就任した」と浮かれた時から5年。今、ようやく米国で指導者として成功する自信が付き、スタートラインに立った自分があります。

就任1年目。男性アシスタントコーチが、私の監督の座を奪おうとしていたことが分かり即解雇。彼の肩をもった4年生から反発を受けました。

その後、チームの建て直しを図り、大きな勝ち星を挙げたものの、中心選手の出場停止や、けが人続出であと一步の壁が破れず、指導者としての難しさを実感。選手の時、結果は自分次第でした。しかし、指導者は、他人(選手)のパフォーマンスによって評価される仕事です。

去年は、新人選手のリクルートに失敗し、監督就任以来、最悪の成績でした。成績が悪いときには、問題も多く起こるもので、自信を失うどころか、そもそも自分にこの仕事に向いているのかと悩んだこともありました。

ぶつかる壁はさまざまです。米国では、選手は監督にはっきり物を言います。対等に近い関係なので、自分の決断についてしっかり説明ができないと、すぐに信頼を失ってしまいます。言葉の壁にぶつかり、熱くなった選手との会話の中で、自分の本意を伝えきれない時もあります。最近、そんな時に自分も冷静になれるよう「let me think about it (ちょっと考えさせて)」といって間を置き、改めて話をするようにしています。そうすることで、私の決断が選手の意に反するものであっても、私が聞く耳を持っていることが分かり、納得してもらえることが少なくありません。

選手の獲得には、大学の監督やコーチが活発に動きます。高校やユースクラブの試合に行き、有望な選手を探します。米国の大学女子サッカー部で、アジア人監督は数えるほどです。ユースレベルもしかし。その中でアジア人の「女性」は私くらいしか見当たりません。日本女性の私が、選手をリクルートするときは、その壁によくぶつかります。ユース年齢の選手達は、それまでの指導で

慣れているせいか、男性コーチを選ぶことが多いようです。

当初、私も男性コーチのようにリクルートしようとしていたのですが、最近、自分が女性であること、日本人であることを前に出すようにしています。私のチームを選んだ選手は、私の指導方針やスタイルを好んで来ているため、衝突も少ないのです。

他にも女性であるという壁があります。指導者会議などでは、男性の意見や議論がほとんどを占めます。経験のある男性指導者が多いカンファレンス指導者会議は、私の苦手な時間でした。意見を述べることもなく、時間が過ぎるのを待つだけでした。

でも、最近ではできるだけ意見を言うようにしています。まだまだ「おまえ、何を言っているんだ」的な扱いを受けることが多いのですが、試合で少しずつ成績を残していくことで、経験も実績もある男性指導者達に耳を傾けてもらえるようになってきました。この現実を壁と見るのではなく、チャレンジ(与えられた挑戦)と受け止めています。

今年で34歳になります。5年間のいろいろな経験を経て、やっと周りの米国人、ヨーロッパ人、南米人、経験のある監督達と肩を並べて戦う自信がついてきました。スタートラインに立ち、ここ米国で、夢に描いたサッカーの指導者に、いずれは教育者になれるようにがんばります。

今までコラムを読んでくださった皆さま、これからも女性スポーツのために、それぞれの場所で戦い続けましょうね。

【はねいし・かなえ】 日本女子サッカーリーグ(ジェフ市原)でプレーした後、米国にサッカー留学し全米優勝を果たす。現在、セミプロチーム「ニューヨークマジック」キャプテン。マウントホリヨーク大学サッカーチーム監督の傍ら授業も担当。コーチ学・体育教育学専攻(Sport Pedagogy)博士号取得を目指している。WSF ジャパン会員。